

附属学校・地域公立学校における特別支援教育普及の取組

武田鉄郎（和歌山大学 教育学部・教職大学院）

藤田絵理子（和歌山大学 教育学部・附属3校教育相談コーディネーター）

小林史、小畑伸五、道上里砂（和歌山大学附属特別支援学校）

田中千映（和歌山大学附属小学校）

谷口英治、釣本享子（和歌山大学附属中学校）

梶本久子（和歌山市 楠見小学校）

（研究の背景と目的）

昨今、附属学校や地域の学校で、多様な児童生徒対応のバリエーションが広がり、教員の戸惑いが語られることも増えた。一方で、関わりのベースに、特別支援教育の視点を加えて対応すると、児童生徒との関係性がスムーズに変化することもある。

和歌山大学教育学部附属特別支援学校は、長年、地域のセンター的な役割を担う研究活動を継続し、校種の異なる附属学校、地域の小学校などへの直接訪問、コンサルテーション活動を行なっている。

本稿では、附属学校また地域の学校に対して、特別支援教育の視点を活用した児童生徒との新たな関わりの模索、契機となる4分野【①交流学习の深化 ②地域支援（学校支援） ③松の実教室、はごろも教室 ④附属3校コーディネーターの会について】の研究活動を紹介することを目的とする。

なお、今年度は、コロナ禍という特殊な環境であったため、感染予防に細心の注意を払って活動したことも併せて報告する。

① 交流学习の深化について

○経緯

- ・附属小学校と附属特別支援学校小学部は、長期間、毎年、交流学习を行っている。これまでは、年間4回ほどを目安に取り組んできた。交流時における教員による行動観察から、子どもたちはお互いを仲間と感じ、交流学习を楽しみにしている様子が見受けられる。

○ねらい

- ・共通のねらいとして、「共に学び、共に遊ぶことで、お互いを知り合い、仲間意識を育てる」ということをあげている。特別支援学校の児童については、普段と違う集団の中で同世代の仲間とかわわりを楽しんだり、自主性や社会性を育んだりすることをねらっている。附属小学校の児童にとっては、多様性や共生を学ぶ機会になっている。

○内容

- ・本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、顔と顔を合わせての交流学习は実施できていない。各校の担当者で、打ち合わせを行い、今年度は、ビデオや手紙を通しての間接交流を行うことにしている。具体的には、各校の取り組み（劇あそび、音楽発表等）を視聴し、ビデオレターなどで、感想を交換し合って交流を進める予定である。

○成果と課題

- ・交流学习が単発で終わらないように、学習の前後の各校教員の打ち合わせを行う等、取り組み活

動の充実が必要である。また昨年度からは、特別支援学校小学部主事(小林)が附属小学校を訪ね、障害理解、多様性等を含む内容の交流前に実施するオリジナル出前授業により、学習協力も行っている。今後の課題として、交流学习で学ぶ合うことを通じて、双方の児童がどのように変化したか、どのような気持ちが芽生えたか等の評価により、改善点を見出す必要がある。

また、交流に関係する各学校の教師間の連携を深め、障害のある児童もわかりやすく、楽しく参加しやすい学習内容や支援の充実が急がれる。

② 地域支援（学校支援）について

○目的

- ・地域の学校で、困り感を抱える児童及び教員のニーズに応じた支援を行う。

○内容

- ・市立小学校A校、B校への直接訪問・授業観察・相談支援

オンライン相談会の開催（A校、B校 参加者 10名）

- ・附属小学校への授業観察・相談支援

○成果と課題

- ・事前に「気になる子どもシート」を担当が記入し、活用することで、訪問前に担任の相談の主訴を把握でき、児童を観察しやすくなった。
- ・子どもの行動を関係者（複数の眼）で、幅広くとらえることで、子どものしんどさの背景を教員間で共通理解することができ、その後の支援につながった。
- ・学校で孤立しがちな特別支援教育コーディネーターや担任の不安な気持ちを聞き、共に考えること、チームで子どもを観察し、支援することの大切さを伝えること等を通して、校内支援体制の基盤づくりを進めることができた。
- ・訪問校の管理職の協力も得ることで、連携がさらに促進された。
- ・「特別支援教育」からの見方で、環境要因なども合わせて子どもの言動を読み解く視点を伝えることで、教員が焦らず、関わる際にゆとりが生まれた。
- ・子どもの目線で子どもが抱いているであろう困りごとを代弁することで、教室内環境をシンプルに変化させ刺激を減らし、その結果、行動面の落ち着きに繋がった。

③ 松の実教室（中学校）、はごろも教室（小学校）の定期開催

○目的

- ・附属小中学校で、集団活動において困り感を抱える児童及び生徒ニーズに応じた支援を行う。
- ・自己理解、他者理解の概念を深める、コミュニケーション力の促進を目指す。
- ・しっかり見る、聞くなどの学習の基礎を意識して働きかける。
- ・グループやペア学習により、仲間との安心感のなかで、コミュニケーションの楽しさを味わう。

○内容

- ・中学校 松の実教室

昨年度に引き続き実施2年目であり、月に2回、木曜日の放課後、16時から17時、中学1年生から3年生、男女、定期参加者、4名。

生徒のメンタルヘルスやソーシャルスキルの向上の手助けとして少人数対象のグループ学習を実施。

附属中学校の学校カウンセラー2名が、ファシリテーター、附属中学校の学力向上支援教員（主に、別室や不登校気味の生徒対応担当）、附属3校（小中学校、特別支援学校の3校）教育相談コーディネーターが協力して行う。

コロナ対策があったため、10月開始、2021年3月まで 概ね月に2回、10回実施計画予定。

・**小学校 はごろも教室**（今年度新設）

支援ニーズを鑑み、管理職の後押しを得て、小学校でもコミュニケーション能力の向上のため、「はごろも教室」を開始。2021年1月より、月に2回、水曜日の放課後、5回実施予定である。低学年と高学年の2部制、2名ずつ計4名の児童に対して、附属三校教育相談コーディネーターがファシリテーターとなり実施。

小学校敷地内の「シンボルツリー、はごろもの木」にちなみ、副校長が教室名を考案した。

○成果と課題

- ・参加者や保護者からは、コロナで実施できない間に、「松の実、再開はいつからですか？」「またやってほしい」「子どもが楽しみにしています」など生徒や保護者から、積極的な意見が寄せられニーズが明確化された。
- ・開始できると、安心できる居場所になっていたのか、言葉での表現は多くはないが、マスク越しに、ホッとした表情が見受けられた。
- ・参加2年目の生徒は、ワークシートへの記入もスムーズになり、以前の思考の硬さが少しずつ和らぎ、柔軟性、様々な視野で物事を捉えられている表現が観察された。
- ・他者との会話の面では、キャッチボールはまだスムーズではないが、互いの話に耳を傾ける、他の人が喋っている時には黙る、待つ、などの会話の技術も習得されていた。クラフトなどの作業では、イメージを膨らませて色あいを工夫して作品に込めた想いを他者に説明し、細かい作業に手間取っている友人を「こうしたら、上手くいく」とコツを伝授しながら手助けするなど、スムーズな関わりも見られた。
- ・ソーシャルスキルは、すぐに身に着くものではないが、同じ場所、同じメンバーでの学校教育での学びとは違う関わりを継続することで、第一に学校内でリラックスできる生徒の安心な居場所を提供できた。集団の中では、遠慮がちな存在である生徒への松の実教室を通じての個別の関わりは、自己理解、自分を表現する自信、楽しさ、自分らしい高校生活を送るための進路選択を考える機会の一助となった。
- ・附属特別支援学校から、ゲストティーチャー2名も招き、包括的性教育を通して自己理解の幅を広げる試みも計画中である。
- ・小学校のはごろも教室では、「めっちゃ楽しい」、「楽しみ」、「落ち着く」などと児童から笑顔で前向きな感想がある。保護者からも、続けて欲しいとの要望もある。
- ・高学年になると、自信をだんだんなくしている様子も観察され、集団での困り感に対して早期に個別支援、介入する必要性が高い。
- ・感覚統合の苦手さ、短期記憶の課題、コミュニケーション、学習面の理解の困難さなど、個別の課題が集団場面では具体的にどのような困り感として現れるのか、本人も無自覚な

ままであることが多いため、時間をかけて、さまざまなパターン、支援方法のバリエーションを検証する必要がある。

- ・今後も、継続支援により、児童生徒の幅広いニーズや多様性を受け入れる豊かな情緒を育成する教育環境づくりを学校教員との協働のもと開発促進する。

④ 3校コーディネーターの会の開催

○目的

- ・附属3校の校種を超えた連携を深める。情報交換により、それぞれの学校ニーズを把握し、独自の支援の工夫などから学び、自校の支援に役立てる。

○内容

- ・附属3校の校内コーディネーター、校内教頭先生（高等部主事兼務）、附属3校教育相談コーディネーターが中学校会議室に参会し、「コロナ禍での学校生活の変化について」情報交換を行う。コロナ禍のため、広い部屋、少人数で開催。（参加者5名）
- ・3校それぞれの課題、各校で奮闘している教員仲間を親しく知り、連携を深める。
- ・コロナ禍で、家庭学習が充実したことが、学校再開時に成長として現れたなど、悪い面だけではなかったが、夏休みの少なさで、教員も新学期準備などで休息できず慌ただしい年度であったことも語られた。

○成果と課題

- ・コロナ感染拡大により、通常、年3回実施されてきた会が、年度末の一回のみの開催となった。
- ・開催回数は減ったが、少人数であったため、本音が語り合え、児童生徒の支援、コーディネーター業務と担任を兼任する大変さ、校内情報を集約する難しさなども語られた。